
シュレディンガーライフ

kirabosi_y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュレディンガーライフ

【Nコード】

N4866Q

【作者名】

kirabossily

【あらすじ】

大学生のお話。エセSF風味のぐだぐだ恋愛。

シュレディンガーライフ(1)

大学4年生ともなれば、当然卒業研究をしなくてはならない。僕だってその例外ではなく、研究室に配属され、さあこれからどうしようかと、そう思っていた。地方の三流大学であっても、やはり卒業論文を仕上げなければ卒業する事は出来ない。

しかし僕だって、それなりの興味があつてこの学科に入学したのだ。これまでの大学生活三年間だって、遊び呆ける事も無く、カンニングに頼ることも、過去の問題に頼ることも無く、単純に勉強をして過ごしてきた。まあ、カンニングも、過去の問題も、人脈があつてこそその話ではある。サークルにも入っていない僕では、過去の問題を用意する事は出来ない。僕の友人は、自然とうそという人間が集まったらしく、たとえ単位を落としたとしてもカンニングはしない、そんな友人ばかりだった。

大学三年間の中で、大した思い出も無い。バイトと学校。その記憶ばかりである。実験のレポートに追われ、試験対策に追われていた。ズルをしないという事は、自分で決めた事だったけれど、それを守り続けたのは、ただ単に意地だったのではないだろうか。今になって、そう思う。

結局のところ、真面目にそんな積み重ねをしてきたけれど、誰に誇るべきものでもない。結果としては、何一つ変わらなかったと言つても良い。自分は学生時代、不正を行う事だけはありませんでした、なんて。そんな事は、就職試験の面接ですらいうべき事ではない。建前としては、それが当たり前なのだから。

就職活動は、大学院に進学したいと両親に伝え、それを了承されることで、先送りした。就職に対して、今はまだピンとこない。そんな程度の理由で大学院に進学するのは、少々おや不孝のような気もしたけれど、院に進むにあたって学力試験を免除される程度の成績は修めていたし、実際、ピンとこない云々が無かったとしても、

院に進学することを考えていなかったわけではないのだ。先の事を考えれば、一年後や二年後、世界情勢の変化によって就職活動はもっと厳しいものになると言う事も考えられるだろう。実際にそういった事に関して、教員や両親からくぎを刺されもした。だがどうだろうか。考えてみればこうも言えるのではないだろうか、そんな事を氣にかけた所で、どうしようもない。世界が滅ぶ事を氣にしているようなものではないだろうか。あやふやなものを氣にかけて、手をこまねいている事には意味がないと思う。

しかしだからといって、何か明確な目標があるという訳でもない。明確に研究をしたいと思うような事が、今まで無かった。だから結局、僕のそういった考えは漠然としたものに過ぎなかったのだろう。考えてみれば、この大学に入った事だって、そういう漠然とした動機からだった。なんとなく興味のある分野があつて、何となくそれに関係していそうな学科があつて、とりあえず地元の大学であつたから。入学試験の、面接においてはいろいろと立派な事を言つて、今こうして4年生まで過ごしてきた。しかし、あの時、面接を担当した教授達に言つた言葉は、全てただの言葉に過ぎなかった。心にも無い事を言つていただけであつた。今にしてみれば、酷く見え透いていて、あの時の事をもしも話題にされたならば、顔から火が出るかもしれない。

でも、この大学に入つた事も、この学科を選んだ事も、後悔しているわけではない。学んだ事は、やっぱりそれなりに興味のある事だったし、だからこそ勉強をつづけることだつてできたのだ。しかし、そんなこと以上に、僕がこの学科を選んで良かったと思う理由は別にある。牧野さんがこの学科に居たからこそ、僕はここを選んで良かったと、そう思っている。

見え透いているというか、軽いとは思ふ。くだらないと言われた所で、それに対して何か言い返す事は出来ない。見え透いているし、軽いし、くだらないと言われても仕方がない。けれど、くだらないことだと自分から言う事だけは無い。

研究室で、僕と牧野さんは基本的に二人だけである。基本的に僕たちの教授は奇矯な人として知られている。変わっているという事を通り越して、変人扱いを受けているようなタイプでもある。

まあ、この辺りに関しては、はっきり言って教授の表面上の情報を超えるものではない。知っている人であれば、みんな知っているというものだ。僕だって、この研究室に配属されるよりも前から、そんな事は知っていた。

研究室へと実際に配属されて、牧野さんと二人きりだと知った後で、教授に関して実際に学んだ事もまた、それと変わらないものばかりだった。変わり者としては、変わり過ぎていて、ほとんど意思疎通できていないと言うのが現状である。どうやら噂通り、卒業論文に関して学生に碌に手だしさせないと言う噂までが本当であるらしい。良いのか悪いのかは、少し考える必要があるだろう。

そんな、考えようによつては一年間自由な時間が約束される、楽々、悠々自適な研究室であつても人気がないのは、あまり就職に関して強い研究室ではないから、だそうだ。この事に関して、僕は牧野さんから聞くまで知らなかった。つまり、一年後なりに行く就職活動は、自分の力でどうにかしなければならぬらしい。困った話ではあるが、これに関してはそもそも、自分の力でしなければならぬと考えていたので、そこまで落胆は無かった。

考えようによつては、それを知りながらこの研究室を希望した牧野さんの理由の方が、僕にとつては重要だろう。教授と顔を合わせたのは、配属されたその日一度限りだった。まあ、その日だけでも顔を出してくれただけありがたいと思う事にしよう。

現状、まさにそう考えるほかならないような状況である。

特にやる事は無いが、毎日研究室に顔をだし、置いてある資料や昨年の卒業論文に目を通して見る。碌に研究はしていないと言うが、しかし、実験に関する数字などはしっかりと残されていた。興味深くはあるが、結局何を目的とした数字なのかは、分からなかった。仕方がないので、卒業論文と比較しながらいろいろと読み解いてい

たりもする。

結果は、良く分かんと言う所だ。

こんなことなら、もっとしつかりと勉強しているべきだったと思う。三年間、ズル一つせずにやってきたとは言っても、例えば授業の内容についてすべて、余すところなく、取りこぼしなく学んできたとは言えないのだ。言ってみれば情けない話だ。二十年ほど生きてきて、何一つ修めていないと言う事ではないだろうか。何かに興味があつたとか、そんな事を言いながら、それは結局何一つ決めてこなかった事に対する言い訳なのではないだろうか。

後ろめたさをこれまで感じてこなかったわけではない。何をどう言つた所で、僕はあやふやな興味に従つてここに居るだけであるし、そこに無理やり理屈をつけて周囲を納得させて来たに過ぎない。その、あやふやな興味にしたつて、牧野さんが居る事に比べてしまえば、その次に来るような理由に過ぎない。

まあ、それが悪い事だとは思わないけれど。それが悪い事だと言われたら、それは仕方がない事だ。

分からないとは言つても、全く分からないわけではない。結果的な所を行つてしまえば、卒業論文を全て読んだ後でそれでも意味が分からなければ、呼んだ人間にあまりにも知識が欠如しているか、書いた人間にそれを伝える意思がなかったかだろう。まあ、卒業論文なんてものを呼んだのも初めての経験だったので、その辺りについてあまり偉そうなことを言えるわけではない。

しかし、文章にして、目的や手順を搔き、そのうえで結論と課題を載せているのであれば、やはりそれはある程度知識を有していない人間にも伝わるようではなくてはならない。伝わらなくても、伝わったような気にさせるくらいのは、無くてはならないのではないだろうか。少なくとも、分と何ついているのであれば、文章として成立して居て欲しいと思う。

うつむ。しかし考えてみれば、どうだろう。専門書を読んでいるようなものだと思えば、ある程度事前知識が必要とされても仕方が

ないのだろうか。その辺りについてはどうでもいいのか。

少なくとも、この研究室にあった卒業論文は、理解させるという点においてあまり優しいとは言えなかった。そして、全てに目を通してわけではないが、僕が見た限りでは、全て教授が書いているのではないだろうか。きつちりとした、読みやすいとまでは言わないが、几帳面な文章ではあるが、所々に散見される癖が共通しているように感じた。そして、そんなあやふやなもの以上に、どうにも学生らしからぬ文章であるとも感じたのだ。比較対象として、他の研究室にあるかこの論文についてもいくつか見せてもらったのだが、やはりどうにも、研究室にあった論分と比べると、それらの論文は稚拙であり、それ以上に情熱や理解を感じなかった。

比較対象があつて初めて分かった事もある。

密度である。殊、この事に関して僕の研究室にある論文は、どの研究室にも劣る事は無かった。実験を碌にしないとか、一年間やる事がないとか、そんな事を言われている研究室には、似つかわしくない。

案外、真面目に研究を行っているのかもしれない、とも思った。しかし、過去に残された実験の結果に目を通していけば、それが間違っている事も分かる。どの実験も、どの数字も、本来それで何かの結果につながるわけではない。

研究室に置いてあるパソコンを、隅から隅までさらってみると、そこには昨年の研究生が残した記録があつた。研究室対抗のイベントなどが行われており、どうやらそこには参加していたらしい。その片隅に、一年間の感想のような文章が残されていた。内容は押して測るべしという所だ。

一年間のフリータイム。そうそうに就職活動を終えたらしい彼は、少なくとも優秀であるか、要領がいいか、運がいいか、そのどれかなのだろ。運がいい事と、容量が良い事に、大抵の事は含まれる。その後はどうやら、研究室でのんびりと過ごしていたか、そうでなければ遊んでいたようだ。

僕の主観を抜きにしても。いや、そんな前置きに意味があるのかは、分らない。ここはひとつ、僕の主観を出来るだけ抜いて、さらに最大現代三者的に見れば、この記録なのか感想文なのか判別の付かないだ分を残した先輩が、あの論文の中の一つを残したとは、到底考えられない。

偏見があるだろうか。しかし、あつた所で、どうだろう。そもそも、前言を翻すと言うよりも、いつそ卓袱台返しするような事を言えば、この事に関して客観的な意見は必要ないのだし、僕がどう結論付けるのかどうかが大切なのだ。

うん。どうせ結論を出すには、答えを聞くしかないのだ。接触不可能に等しいわが愛すべき担当教授に話を聞きに行くよりも、この事に関してはかりそめであつても、結論が出たのだとした方が良かったろう。無駄な手間は、省略である。そもそも、危機に言つた所で正直に答えてもらえるかどうか分からない。どんなに教授が変わり物であるとは言つても、研究生に卒業論文を提出させない事が良くない事であるということくらいは、理解しているのだ。だとしたら、その隠ぺい工作の結果ともいえる卒業論文に関して、ありのままを白状するのだろうか、半々と言つた所である。

普通なら、半々どころの話ではないのだが、その辺りが教授は変わつていと言われるその所以だろう。日ごろの行いは重要である。それでいて、広義にやってくれば、まともと言うか、平均以上と言うか、大学で一番分かり易いかもしれない抗議を行つたりもする。それだけならば、研究室にも人気が出るのだろうけれど、現状はまあ、ごらんのとおりだ。

教授は、他の教授達と比べれば格段に若い。勿論、僕たち学生から見れば中年であり、若いとは言えない。しかし、比較対象として教授達を持ってくれば、若いと言えるだろう。あるいは、若いと言わざるを得ない。

こうして暗くなるまで研究室に残っていると、どうやら教授も同じくこんな時間まで残っているらしい事は分かる。あるいは、今尋

ねていけばいろいろと話を聞く事も出来るだろう。しかし、聞いたところでどうなるだろうか。今のところ僕は教授の研究に関して何を理解しているというわけでもない。

勿論、大まかな概要については理解している。あやふやではあっても、興味があつた事だ。この大学を、この学部を、この学科を、この研究室を選択したのは、全てこのあやふやな興味のためだ。あるいは、このあやふやな興味に明確な輪郭をつけるためだ。その結果どうなるのかどうかを、掴む事は出来ない。輪郭のないものを掴もうなんて、それ自体、土台無理な話だ。

ふうむ。

ここまで考えて、僕は腕組みをしてため息をついた。牧野さんは暗くなる前に研究室を出たらしい。女性なら当然である。田舎の大学では、学生は車か原付きで通うのが常なので、送っていくとかそういう話にはならない。牧野さんは一人暮らしなので、もしかしたら歩きで通っているのかもしれないけれど、車で通っている僕が送って行こうと申し出ても、どうにも下心が見え透いているようで氣後れしてしまう。実際、下心がまるつきりないわけではないので、余計に氣後れする。

いや、この際牧野さんの事は関係ない。自分で考えているのだから、包み隠さず正直なところを言おう。

教授の研究テーマは、いろいろと小難しい話を置いておけば、永遠。勿論、そんな物は無い。しかし、近づく事は出来る。反永久機関をつくって見せると豪語する。そんな研究に、数年前の僕は興味を持ち、数年間それは変わらなかった。その数年間で耳にした、様々な悪評を差し引いても、それだけは変わらなかった。もしも、この研究室における今年の研究生が僕一人であつたとしても、後悔する事は無かつただろう。

だったら、決まっている。考えるまでも無く、やるべき事は明らかだ。言い訳のように、こんな所で過去を掘り返しているだけでは、何一つ掴めるものは無い。あやふやな興味に輪郭を手に入れたいと

言うのなら、そのためには実像に近づかなければ始まらない。ウジウジと、一年間同じことを繰り返しているだけで、自分から手を伸ばすことも無く無為に過ごすのなら、一年間自由に過ごした我が先輩よりも救えない。潔さがないだけ、余計に救われない。行動しなければ、何も変わらない。変えるためには、まず、変わらなければならぬ、自分が。

深呼吸をして席を立ち、研究室から出て、教授の部屋の前に立つ。もう一度深呼吸して、決意を新たに。ノックすると軽い返事。扉を開けると、山積みになった資料の間から無精ひげの顔がのぞいた。

「やあ、遅かったじゃないか。時間を掛け過ぎだよ、君は」

扉を開けてそう言われてから、一体何を言えば良いのか考えてこなかった事を思い出した。自分の間抜けを思い知るまでも無く、教授は言葉を重ねた。まるで数年間待ちわびた友人が、やって来たように。

「君みたいな子がいつか現れると思ったけれど、タイミングが良いもんだね。運命なんて信じないけれど、巡りあわせってもものはあるもんだ」

何を言っているのか分からないがやはり変わっている。碌に話した事も無い学生相手に、旧来の友人のように話しかけてくる。それが、本当の意味でのファーストコンタクトだった。

馴れ馴れしいと言えばそれまでだが、その辺りも変わり者らしく、普通ではない。正直言って、これで教授でなければ即座に距離をとりたいタイプである。馴れ馴れしいのは、するのもしられるのも得意ではないと言うよりも、嫌いである。

言葉一つ一つが、研究者らしくない。そう思ったが、そうでなければ永遠を目指す研究なんてしないだろう。そんな物は無いのだと、研究者でなくても知っている。そんな物を目指す事は無いと、文学者だって知っている。

けれど、そんなあやふやでつかみどころのないものを目指す人間が居たっていい。人にものを教えるためには、それを十分に上に理

解していなくてはならない。だとしたら、目の前の無精ひげは誰よりもそれを理解しているだろう。若くしてその立場にある以上、それに相応しい程度には優秀なのだろう。何よりも年齢がものを言うこの国で、それを覆しているのだから。

あやふやなものを求めているのは、お互い様。選ぶべくして選んだもので、自分自身が選んだ事だ。この研究室に居る事も、今こうして、無精ひげの前に立っている事も。誰かに言われてそうした事ではない。誰かにくぎを刺された上で、こうした事だ。

だからまあ、自業自得。この時の選択が、その先の人生すべてを決めてしまうような、大きな流れの中に、文字通り巻き込まれてしまうものであったとしても、それを誰かの性にする事は出来ない。勿論、誰かのせいにする事も無いだろうけれど。それだけはしてはならないと、心に刻んでおくとしても。

人生は案外簡単に決まってしまうものだと知ったのは、すべて決まってしまった後になっての事だ。

今の僕は、目の前の無精ひげが言う事に目を白黒させるばかりで、牧野さんに対する恋とか、自分の抱いていたあやふやな興味についてとか、そう言う事に対して何一つ確かな結果を残しているわけでもない。

物語が加速して行くものだとしたら、つまり最初は遅いという事だ。遅いからこそ、速くなる余地がある。だからまあ、こんなもの。一歩踏み出しただけに過ぎないのだし、文句は受け付けない。

シュレディンガーライフ(2)

「おはよう」

「……おはよう、牧野さん」

いつの間にかそんな時間だったのか。全くもって、何と云うか、時間が惜しいという事は無いはずなのに、徹夜をしたらしい。我ながら殊勝な話である。珍しいというか、自分らしくないと思う。努力はしても無理はしないのが自分らしさだと考えていたのだけれど、どうなのだろうか。

自分が変わったのだとは、思えないけれど。まあ良し、どうせ、なるようにしかならない。

「もしかしてあなた、徹夜したのかしら？」

「……どうして？」

牧野さんよりも先に僕が研究室に居る事は珍しくない。実際数えた事はないが、僕の方が先に来ている事の方が多いのではないだろうか。この辺りに関してあまり考えた事も無かったのではっきりとした事は言えないけれど、おそらく、それで間違いない。

「だってあなた、昨日と同じ服を着ているもの」

なるほど。僕が不潔な学生でない限り、その通りだ。臭くないかな。

「毎日大きな違いが出るほど、お洒落なつもりも無いけれど。まあ、言う通りだよ、牧野さん。そんなつもりは無かったのだけれど、確かに徹夜だ。つまり、完徹」

「言われなくてもそうだとわかるわ、顔を洗って来る事をお勧めしたい所だもの。けれど、そうね、急にそんな事をして何かあったというのかしら？」

どこことなく興味を持っていそうな牧野さんの勢いをそぐために、一度手を突き出して制しておいて、顔を洗って来る事にした。おすすめされたのだから、そちらを優先して悪いという話は無いだろう。

ついでに、と言うか、時間を稼いだのだからその間に情報を整理しておこう。牧野さんに説明する上で、まず自分が理解していないければならない。分かっていない事は、説明しようがないのだから。

教授の話ではないが、やはり人にものを教えるのであれば、その事に関して十分に以上に理解を深めていなければならないと、僕は考えている。世の中に他の考え方をする人もいるだろうが、概ね共感してもらおう事が出来る考えであると思う。

つまり、徹夜でいろいろと考えはしたし、目を通しはしたのだけれど、僕の理解は居まだそこまで至っていない。こればかりは、僕的能力不足であり、努力不足なのだろう。そうは言っても、僕だつて何一つ理解できないほど頭の回転が遅い人間であるわけでもない。普通の頭を普通に働かせた結果、少しくらいは理解できた、と言ってしまえばそれまでなのだが。

何にせよ、そもそも理解するための材料が全くない状態ならばともかく、この研究室に入ってから以来、過去の論文に目を通す位の事はしていたのだ。それらの行動は無駄になることなく、今につながっている。

「それで、考えはきちんと纏まったかしら？」

研究室に帰ってくると、牧野さんはそう言った。どうにも、僕の考えはお見通しだったらしい。恰好が付かないことこの上ないが、そんな事は無かったような顔をして、再び自分の席に腰かけた。

「コーヒーはいかが？」

「……いただきます」

コーヒーをブラックのまま飲むと、ようやく目が覚めたような気がした。そう言えば、昨晩は無断外泊と言う事になるのだろうか。別にそれで電話がかかってくるほど、両親とべったりというわけでもないが、連絡くらいは入れておくべきだったかもしれない。

ふうむ。しかし、一晚こうして全く確認する事の無かった携帯電話に、何一つ着信やメールが残っていないと言うのは、あれだ。なんというか、ブルー。思わず、新着メール問い合わせをしてしま

たくなる。

まあ良いや。……あまり良くないけれど。一度深く考えてみる必要はあるが、この際おいておくしかない。

「それで、実験に参加させてもらえる事にでもなったのかしら？」

「その通りだよ」

僕がそう言うと、牧野さんは目を丸くした。どうやら、分かっていると言ったのではなく、冗談の類だったらしい。牧野さんが教授をどういう人間であると捉えていたのかがひそかに明らかになった。

牧野さんとの付き合いも数年になるが、こんな顔は初めて見たなあ。驚いた顔もキュート。その顔を見る事が出来ただけで、徹夜した甲斐があったというものだ。無駄ではなかったどころか、おつりがくる。

「それでまあ、全体の概要について理解しておくように言われたからね。完徹するほどのつもりは無かったけれど、気が付いたら朝、だ。今日から実験だと言われているから、それに関しては仕方がない。早く理解しておくにこした事は無いのだし、まあ、その辺りはいろいろだ」

「ふうん……」

言葉を濁したのは、気恥かしい事を言いそうになったからだ。いくら僕だって、義務感だけで徹夜したりはしないだろう。ズルはしなくても、誤魔化すことくらいは心得ている。高校時代、やってもない課題について、あれこれと理屈をつけて取り組んだ事にした記憶だって、あるのだ。

一つ反省するのなら、言葉を重ね過ぎて言い訳じみてしまったことくらいだ。全く、後ろめたい事も無いのに、何をやっているのか。

「それで、資料がそれ？」

「そう」

手渡すとそのまま牧野さんは資料に目を通し始めた。どういえば、何となく優秀だと思っていたけれど、実際のところ牧野さんが頭の

良い人であるかどうかは知らないのだった。

あまり人を計るような事を言うものではないが、イメージが先行していた事に今更気が付いた。こういうのを、惚れた弱みと言うのだろうか。結果次第では、恋は盲目、あばたまえくぼ。しかし今の所、何とも言えない。

「まあ良いわ。あなたのまとめた所を先に聞かせてもらえるかしら」
……。

まあ、最初からそのつもりだったのだし、構わないのだけれど。何だろう、この、何かが引っ掛かるような感覚は。上手く使われているような気がしてしまうのだが。

そんな事無いよな？

「うん。まあ、牧野さんも分かっている通り、教授の研究は、永遠に近づこうとしている。永遠というものが存在しているのかどうかは、ともかく、だ。しかし、言うまでも無く永遠というものは現代において、捉えどころのない不在のものだ」

「そうね。この研究室に居ながら、こんな事を言うのは何だけれど、現代の科学において、それらしからぬ研究テーマであるとは思うわ」

牧野さんは頷いてそう言った。そして、僕もまたそれについて同感である。牧野さんが言ったから、というわけではなく、それこそ、そんな研究をしている人間が居ると知った時からそう思っていた。

永遠。なんという曖昧な存在なのだろうか。物事に始まりというものがある限り、それは存在できない。しかし、未来においてそれが存在し得ないとは、誰も言えない。

存在しないものに対して、存在否定を立証することは難しい。そう言ってしまうえばそれまでだが、そんな事は、僕からしてみれば詭弁に過ぎない。不在証明を成し遂げた後で、そういう事は言えば良い。と、思う。

「あいまいで、科学的というよりは文学的な概念だと思う。そして、過去の論文を読めば、教授は同じく文学的な概念からそれにアプローチしようとした事が分かる。みんな大好き、箱の中の猫」

「量子論でしょう。在るのか、無いのか。その曖昧な可能性を実現することで、本来ありえない物理法則の外にあるものまで、手を伸ばそうとした」

結果は、言うまでも無く失敗である。失敗していなければ、今ここでこんな研究はしていないだろう。

反永久機関をつくる上で、一体どのような事を考えたのかは分からない。結局そこに至るよりも以前に、頓挫していたのだから。箱の中に曖昧な状態をつくること自体、出来なかった。

「失敗を経て、研究方針は大きく変化する。永遠を求める上で必要であると、教授が考えた曖昧な状態。それに関しては棚上げになったのか、まあ、その辺りの思考は結局分からないのだけれど、とにかく別方向に進んだ。既に確立されている、光の速さを超えるという分野において、その現象を縮小し、小さな場所でそれを実現しようとした」

現代において、光の速度を超える研究はすでに終えられている。光の速度を超えることで過去にさかのぼる事が出来るという話は、結局否定されたのだった。その実現によって、いくつかの論文が価値を失っただけの話である。

光の速さを超えて動いた所で、結局それは光を置き去りにして動く事が出来る以上の意味を持たない。例えば、光以上の速さをもつて後ずさりしたならば、光が追いついた時自分の後姿を見る事が出来るだろう。

それはある意味、過去を目にしたと言えるのかもしれない。しかし、結局それは自分に関してだけの事である。どこまで言った所で、過去の人間と言葉を交わすことは不可能なままだ。

未来において、別の方法が発見されない限り、タイムマシンは完成しないのである。

だからむしろ、この発見に至るまでの副産物こそ重要だった。例えば、エネルギー効率の話であったり、そこまでの速度を観測するための観測機であったり、実験を行う上で実現されたそれに耐える

強度を持った構造であつたり、だ。

それは一つの技術革新である。

「なぜそんな研究をしたのか、目的を考えれば疑問だったのだけれど。一体、実際のところどうなのかしら、まさか、とりあえず何かしらの手柄を立てるため、なんてつまらない事ではないでしょう？」

「つまらないとは直截的な言い方だね。まあ実際、普通ならそこまですべての事だと、そう言いたいところなのだけれど。教授に関しては、その辺りがどうなのか断言できない。計算した上の事であっても不思議ではないし、何も考えていなくてもおかしくは無い」

昨晚、長時間では無くても、実際に会話をしたことで、教授に関する僕の抱く印象は余計に混乱したのだった。考えているようで考えていないのか、考えていないようで考えているのか。

分かったような事ばかり言っているだけなのか、全て見通して知らない振りをしているのか。

「何はともあれ、それは一つの成果として完成している。実際、その結果得られた権利で、教授にもある程度のお金が入ってきているようだしね」

「その言い方だと、その研究も、最終的に行きつく所は同じのようね」

結局、目指す所は変わらない。

そもそも、その光速に関する研究もまた、そこに至るのだと考えるべきだ。実際、今日から始まる実験についての説明には、その辺りも含まれていた。

光速と、曖昧さと、永遠。

「それで、一体どういう意味になるのかしら。この実験レポートから読み取れるのは、光速を超えた粒子によって曖昧さを生みだす。そんな所だけれど、けれどそんな事、実際に可能なのかしら？」

「そのための実験だろう。ここからはまあ、憶測。それに正直言つてあまり科学的な物言いではないのだけれど」

そんな前置きをしてから、僕は一晚、眠ることなく考えた事を口

にした。

「教授の作った、光速実験機。あれは、円形状に循環することで、光速に至るまでの助走を行うものだった。実際、今までに行われた光速実験では、その方法がとられる事は無かった。理由は簡単な話で、円状に循環させてしまえば、正確なデータを取ることが難しいからだ。何せ、光の速度で動いているのだから。その辺りを解決したのが、昨年までの教授の実績。けれどまあ、この実績も本来は助走距離の省略程度にしか、受け取られていない」

牧野さんが頷いているのを確認して、先に進む。まあ、ここまでは前提条件、憶測が介在するのは、ここからだ。

「円状に循環する粒子。さらにその縁の半径が短いという事は、どうなるのか。多分それは、疑似的にはあれ、存在が多重化してしまふという事ではないかと思う。光速を超えて後ずさりすれば、自分の後姿を目にする事になるように」

「けれどそれは、実際に自分が分裂しているわけではないわ。ただ、そう言う風に錯覚してしまうだけであつて、あくまでもそれは触れる事の出来ない幻覚のようなものよ」

「自分が動けばそれまでだろう。でも、シュレディンガーの猫の話あれだつて、言ってしまうえば箱を開けるまでもなくネコは生きているか、死んでいるかしている。要は、観測者が観測できない状況をつくる。それを目指しているのではないかと思う。それこそ、科学的ではない言い方になるけれど、世界が認識を違えてしまうような、そんな速度にまで至れば、それは曖昧な状態と言えるのではないか」

円状であるのは、始まりと終わりを曖昧にするためであり、助走距離を際限なく用意するため。

「おおむねその通り、お見事だよ。まさか一晚、眠る事無く考えているとは思わなかったけれど。やっぱり君は、思った以上という事かな。まあ、そこまで文学めいたもの言いで語ってくれるとは思わなかったけどね」

いつの間に入って来たのか、僕と牧野さんの後ろから、人を食っ

たような声が聞こえた。褒められているのか、皮肉を言われているのか。この無精ひげの男の言いこそ、曖昧の極みだ。

「理解が追いついた所で、実験を始めようか。この実験はやる事は無いのに時間だけはかかるぜ。きみたちは院まで進むのだろう？」

僕と牧野さんが頷くと、教授は何が嬉しいのか分からないが、とにかく嬉しそうに言った。

「とりあえず、今年の論文をでっちあげるための悪巧みでもしながら、お互いに自己紹介でもしよう」

シュレディンガーライフ(3)

「ちよつと、大丈夫？」

牧野さんの声に、手だけ振ってこたえた。あまり大丈夫ではない。実験が始まってから、すでに半年以上たっている。序盤こそ、計画通り、予想通り、上手く推移していたはずだったが、途中ですっかり止まってしまっている。そもそも、教授の作成した円環型の加速器は、光の速度を超えた後の交流誌の状態を観測する物だ。光の粒子性から、光の粒子そのものを抽出すること自体は、すでに数十年前に成し遂げられている。元より光であるのならば、それはその速度で動いてしかるべきである。

まあ、人の限界として、抽出された光粒子の中から、本の少ない数だけを動かすのが限界であつたわけだが。その意味で言えば、教授の加速器は、一般的なものよりも限られた、ほんの少しだけの光粒子を加速するだけで精一杯である。これに関して言えば、状態を観測するという目的から言つて、少ない方が簡単である事、より小さな規模で完成させる事、それらの事情の方が技術的な面で言うよりも大きい。

さらに言えば、最終的に、加速した光粒子が自分自身に追いついてしまうほどの速度を得なければならぬのだ。円環が小さいほど、その速度が小さく済む。

技術的な意味での問題はクリアしているはず、なのだそうだ。教授の言葉を、丸ごと、全て信用するのもどうかと思う。半年以上、こうして同じ場所で同じ目的のために頭を働かせたうえで、そう思う。良くも悪くも、あの無精ひげは信用できない。翌日の実験開始時間を告知しておいて、それを自分が忘れて僕たちをやたら早い時間絡まっていたりする。この話だけならば、まあ、馬鹿なだけだろう。しかし万事においてその調子なのだから、プライベートにおいて距離を詰めようという気に全くならない。

そんな教授であっても、研究においてはしっかりしている。しっかりしているというか、執念を感じる。なぜそこまで情熱を燃やしているのか、その理由は知らない。というか、興味も無い。男の話だし、個人的に興味をそえられるような話でもない。

閑話休題。なにはともあれ、研究は今現在、立ち往生している。

光速を超えてある程度の速度に至ると、明らかにおかしい現象が起こる。質量異常と、速度の低下。そもそも何が起きているのか分からない、というのが現状である。教授にわけが分からないというのなら、必然的に僕にもわけが分からない。計測器の異常かと思われたが、そういうわけでもない。

勿論、全てコントロールできる実験だとは思っていなかった。僕は自分自身の卒業論文の題材として、この辺りの事を取り上げようと考えている。実験を開始する上で、卒業論文をどうでっちあげるかという教授の悪巧みを、拒否してしまっている。その辺りは、ズルをしない事に関して一貫したいという、自分自身のための選択だった。そうした事情もあって、僕はこの問題について真剣に考えなければならぬ。

質量が増大するというのが、計測器の異常でないとしたらどういう事なのだろうか。例えば、うつむ。光速を超えた世界が未知数である事は確かなのだが、しかし、この程度の速度での観測は過去に行われている。その結果を顧みれば、あり得ないはずの現象、なのだそう。

個人的な意見を言うならば、あくまでも無知な素人に毛が生えた程度の若造の意見として捉えてもらいたいのだが、あり得ないはずの現象という言葉を使うこと自体、誤りだ、と思う。

起っているのだから、そしてそれが繰り返されているのだから、それはそういうものであると受け止めなければならない。

「牧野さんは何か考えついた？」

「いいえ、さっぱり」

うつむ。あっさりだ。その事に関して、大して悩んでいる事を感じ

じさせない。実際の所がどうなのかよく分からないが、男二人と比較したら、その辺りは歴然である。

あー、もう。ここ数週間に至っては、実験自体中止して、答えを探している。数値を眺めて、グラフを比較する。そんな作業をしてお互いに意見を出し合ったりしている。何せ、過去のデータが存在しないのだ。推測しようにも、全く未知の領域である。

光粒子自体、普遍の存在である事を疑い始めると、收拾がつかないのだけれど。

「最後に家に帰ったのはいつ？」

「さあ、もう、良く分からん。思い出せん」

もうあれだ、教授を指して無精髭というのも憚られる。髭剃りを研究室に持ち込んでいること自体、何だかこう、駄目な研究生の典型のようで自分が嫌になってしまいうだった。そのおかげで、無精髭二号の汚名は、未だ被っていない。しかし不潔である事は、教授と同じくだ。

自分で臭いのが分かる。牧野さんと最大限距離を保っているのは、最後に残ったエチケットだ。研究室に寝袋を放り出しておいて、今更エチケットも無いのだけれど。

そう言えば以前、僕の使っている寝袋で牧野さんが眠っているのを見たときは、恥ずかしながらテンションが異常に上がってしまったのだった。勿論、同衾したとか言う事も無く、寝顔を観察したという事も無く、紳士的に、自分の乗って来た車の中で仮眠をとったのだった。牧野さんは時折、驚くほど無防備だ。

「増えるって何？ 太っているのか、しかし太っていない。どういう事だ、ダイエットしろ」

「それはわたしに言っているわけではないのよね？」

言っているけど言っていない。牧野さんは太っていない。

もう、一体何事だ、光粒子。僕たちが知らない間に、間食でもしているのだろうか。痩せたい、痩せたいいいながら、お菓子を食べる事を止めようとしないう女性か、貴様は。太るな、維持しろ。

「わたしに言っているわけではないのよね？」

「言っていないせん」

牧野さん声怖い。背筋が凍りついた。

「あなた、一度家に帰った方がいいのではないかしら。酷い顔をしているけれど」

「それは不細工という意味ですか……」

傷つく。心配されるほど不細工って、普通に傷つく。どんなレベルだ。笑えないというか、陰口に出来ないというか。リアルエレファントマンですか、そうですか。生まれてきてすいません。

「もう、そういう意味じゃないわ」

「そうですか、良かったです。光粒子がダイエットしてくれれば更に嬉しいです」

牧野さんも肩をすくめた。困ったものだよ、光粒子。困ったものだよ。

「……もう良いわ。付いて来て」

手を引かれて研究室を出る。しっかり鍵をして、教授に挨拶もする事無く、お互いの名前の横にある動向表を二人とも帰宅にした。気が付かなかったけれど、いつの間にか夜だ。考えてみれば、ここ数日、昼も夜も分からなくなるような生活をしていたのだった。

ここはどこ、わたしは誰、そして今何時？ そんな感じ。

「まったく。まだ卒論提出までは時間があるのだし、いざとなればあなたの分をみんなですちあげてしまえば良いのよ。そんなふうに自分を追い詰めないといけない理由なんて、あなたには無いのに。教授とあなたは違うのよ、あなたはあの人のように人生を掛けて研究してきたわけでは、無いのだから」

僕の手を引っ張ったまま、牧野さんはそう言った。

牧野さんが言う通りだ。僕がそうしなければならぬ理由なんて、どこにも無い。教授のどうでもいい理由なんてものはどうだっていいのだけれど、しかし僕には、そんなどうでもいい程度のバックボーンも存在していないのだろう。

間抜けといえはそれまでだ。熱くなつて見失つていと言われれば、その通りなのだろう。遅れてきた青春なのかもしれない。

恥ずかしい話だ。恥ずかしすぎて、今ここで止めることなんて、出来ない。

「そうしなければならぬ理由がないからって、それを理由にして、それを言い訳にして、自分が逃げた事を正当化したくなんかないよ、牧野さん。理由は無くても、それでも自分が決めた事だ」

決めたことくらい守りたい。口約束ですら無い、口にしたことすら無い、そんな程度であつても。それでもきつと、初めてそうした事なのだから。

「そう、じゃあ、良いわ」

呆れている、という感じではない。一体どんな顔をして、牧野さんがそう言ったのか、僕がその時の顔を見る事は出来なかった。いつも通り、すました顔をしていたのかもしれない。初めて聞いた声のように、見た事のない表情をしていたのかもしれない。実にシュレインガーだ。

しかし一体、どこに向かつているのだろうか。大学の傍であつても、僕はその辺りの地理にまったく詳しくないのだ。加えて方向音痴でもある。既に大学がどの方向にあるのか、感覚が曖昧になつて来ている。

「今日も家に帰るつもりはないのでしょうか？」

「答えが出たら帰る」

僕がそう言つと、牧野さんは呆れたように溜息をついた。実際に呆れているのかもしれない。自分でもわかるが、決めた事を守る以上に、依怙地になつてゐる。意地になつて、無理をしている。

分かつてゐる。無理をしたからと言つて何かが解決するわけではないのだ。そんな事は、ずっと前から知つていて、以前はその通り、無理をする事無く過ごしていた。もしかして僕は、ただ牧野さんに構つて欲しくて、自分を良く見せたくて、頑張つてゐる自分を見せるために、こんな事をしてゐるのだろうか。

そういう側面が、全くないとは言わない。というか、言えない。

人を好きになるという事は、きつとそういう事だろう。好きだから、好きになつて欲しいと思う。下心と言ってしまえばそれまでだろうけれど、それでも悪い事だとは思わない。まあ、少々不器用すぎるような気は自分でもするけれど。その辺りは、ご愛嬌だ。

「まあ、頑張る事は悪い事ではないと思うわ。非効率だといわれども、モチベーションを保つことで、結果的には良い結果になるのかもしれないのだから。一概にあなたのやっている事を否定する事は出来ないし、そのつもりも無いの」

僕の手を握る牧野さんの手に、少しだけ力が加わったような気がした。それまで以上に強い力で、しっかりと握られた。

「けれど、見て居られないわ。あなたの限界をわたしが知っている」と、そんな知ったような事を言うつもりはない。けれど、あなたは自分が思っている以上に無理をしている」

そんなつもりはない、なんて。そんな無駄な事を口に出したりはしない。結局、その、そんなつもりはない、という僕自身の認識が、牧野さんから見れば間違っているのだろうから。だから、この場で何を言った所で、それが僕自身の認識である限り、無意味だ。無意味で、的外れ。

しかしどこへ向かっているのだろうか。てつきり、美味しい晩御飯を食べるためにどこかへ向かっているのかと思っただけれど。周囲に見える住宅街からは、そんな雰囲気は感じない。隠れた名店でもあるのかしらん。

「それで、どこに向かっているのさ、牧野さん。僕はこの辺りの地理情報にまったく明るくないうえに、方向音痴なんだよ。今ここで放り出されたら、大学まで帰りつけないくらいにはね」

「大丈夫よ」

アパートの前で足を止めて、言った。

「ここがわたしの家だもの」

そこから先、しばらくの間僕には記憶がない。後ろめたい所があ

って隠しているわけではなく、あまりの衝撃に何が何やらわからなくなっただった。だから、牧野さんの部屋が何階にあるのかも、帰りに部屋を出るまで知らないままだった。その辺りの事から、どれだけ僕が衝撃を受けていたのか、分かって欲しい。牧野さん無防備すぎ。

そんなこんなで、気が付いたらお風呂でお湯につかっていた。果たして僕は、ここまで牧野さんの手を借りる事無く来る事が出来たのだろうか。非常に怖い想像だが、意識を取り戻す寸前まで、手を煩わせたという可能性も否定できない。体を洗った記憶は無いが、どうやら髪まで洗っているのだった。シュレディンガー的な想像に留めておく事にしよう。

しかし、僕の記憶に残っていない時間に何があったとしても、何も無かったのだとしても、これから先、牧野さんに頭が上がらなくなる事は確かだった。今までだって、そうであつたといえればそれまでなのだけれど。

その後は、牧野さんの手料理をごちそうになって、気が付いた時には朝だった。牧野さんの料理に対する感想は、何と言うか、可愛げのある味だった。と言っておく事にしよう。勿論、牧野さん本人にそんな事は言えないのだけれど。

何と言うか、お料理練習中といったような、そんな味だった。普段あまり隙を見せない牧野さんなので、そういう部分を見せられると、僕はがぜんテンションが上がってしまうのだった。

このおかげというか、牧野さんのおかげというか。次の朝、牧野さんと一緒に朝食をとって、大学に一緒に歩いている途中で、僕はここ数週間頭を悩ませていた問題に関して、一つの仮説を思いつくのだった。

光粒子が不変のものであり、計測器に異常はない。そのうえで質量が増大したというのであれば、そもそも答えは一つしかないのだ。増えた。

これだけの事を考えつくまでに、どれほどの時間を無駄にしたの

か、考えたくもない。しかしそのおかげで、牧野さんの手料理を食べる事が出来たのだと考えれば、無駄であったとは、口が裂けても言えないのだった。

つまり、教授の方針は正しかったというだけの事である。世界がご認識する状況を作り出すという、少々文学じみた実験は、上手くいったのだった。太るのではなく、分身していたというべきだった。勝手に増えるなどは、言わないが。断わってから増えてもらえれば、より有難い。

案外、世界にとってこの日は意味をもっているのかもしれない。一步踏み出したというのならば、確かな一步を踏み出したのだろう。後に、量子の坩堝と名付けられることになる、既存の物理法則を完全に無視した特殊空間形成の、第一歩だったのだから。この日がなければ、永久機関完成は無かったとすら、言えるだろう。

しかしどうだろう、僕個人から言わせてもらえば、こう言う他ない。そんな事よりも、僕が牧野さんの手料理を食べたという事実の方が、僕にとっては重大だった。つまりこの日は、サラダ記念日である。正確に言えば、カレー記念日だ。

可愛げのあるカレー万歳。

シュレディンガーライフ(4)

あつという間に、僕たちは学部生という立場を終え、僕はドクターコースに進み、牧野さんは院生になった。もともとは、僕も牧野さんと同じく院に進学しているはずだったというのに、知らない間にそんな事になっている。言うまでも無く、教授の暗躍があつたのだろう。いまさら何を言った所で、どうしようもない。

実際、このまま研究者としての道を歩む事を、僕自身悪い事であるとは思っていない。

だから、まあ、文句を言うようなことではないのだろう。院生ではなく、ドクターコースで博士号を取得することにも、教授なりに意味があつての事だろうし、説明する手間が面倒くさいと思つたのなら、それはいつもの事だ。

学部生としての卒業論文は、はつきり言つてあまり出来のいいものであるとは言えなかった。結論を言つてしまえば、ただ、光速で動かした結果質量が増えました、というだけである。その結果を外に持ち出す事が出来ない以上、結果に誤りがあるという疑いは、免れる事が出来ない。

カレール記念日以来、僕たちの研究は一つのブレイクスルーを超え、順調に進んでいると言えるのだろう。加速器を改良し、改良を重ねて、問題に突き当たる度にそれを繰り返してきた。

質量は二倍、三倍、四倍、その速度に達するたびに増加する。勿論それは、実際に観測してしまえば即座に霧散する幻以上のものではない。箱を開ければ、可能性が重なり合う状況は霧散し、ネコが生きているか死んでいるか、そのどちらかに収束するように。

見通しが明るいとは言えないのだろう。勿論、そんな事ははじめから分かつていた事だ。分かっているものを追い求めるのなら、きっと僕はここまでそれに魅力や価値を見出していない。それは、相手の答えが分かつた上でする告白のようなものだ。

折しもクリスマス。今日も今日とて、我らが希望を載せて、加速器は廻り続けている。中に希望が入っている。開ければ何が出てくるか。パンドラの箱のようなものだ。深く考えれば、僕たちは危険な事をしているのかもしれない。

勿論、教授の考えによれば、この規模での実験であれば危険は大きくないらしい。せいぜい、実験棟が吹き飛ぶ程度。そう言った教授の顔が笑っていたので、僕はそれを冗談であつたと思う事になっている。

全くもって大丈夫ではない。原子爆弾の上に立つて、爆発しなければ安全と言っているようなものではないだろうか。しかも、その気爆ボタンは、絶対に押してはダメ、と言われた幼稚園生辺りが握っているのである。

死ねば同じと思って諦めている。ドクターコースに進んだ時点で僕の運命はある意味、教授と一蓮托生になっっているのだ。もしものときは、せめて牧野さんを格好良く庇って死ぬ事にしようという事だけ、心に決めているのだ。

カレー記念日以来、僕と牧野さんの関係が変化したという事は無い。そんな暇は無いだなんて、そんな事は言いたくないのだが、忙しくてそれどころではなかったのだ。そう言えば、やる暇がなかった、なんて言い訳は、時間を使うのが下手であると言っているようなものであると、どこかで聞いた事がある。しかし、実際、それだけ忙しい時だつてある。忙しすぎて、頭が回らないのだ。

例えば話をすれば、忙しさがピークの時であれば、牧野さんが裸でいたとしても全く気にとめないだろう。どれだけ忙しいのか、分かつてもらえたと思う。それは、それは、凄い事なのだった。

計画を立てて取り組んだ所で、計画通りに物事が進まないのは、世の常である。もしも、僕の人生が計画通り進んでいるのであれば、今頃僕は大企業に勤めて、牧野さんをお嫁さんに行っている頃である。現実はまだならないものだ。全くもって、どうにもこうにも。

クリスマスに二人きりと言えば聞こえはいいが、結局、ただ実験

のために過ぎない。牧野さんの手を握った事さえ、僕は無い。その
辺りは、僕に責任があるのだろう。むしろ、責任があるのは僕だけ
なのだが、しかし、人には出来ることと出来ない事がある。光粒子
が増えても、それで僕の何かが変わったわけではないのだから。

「今年のクリスマスは何とも地味だね……」

「去年と変わらないと思うのだけれど」
ふうむ。

牧野さんはあっさりとそう言ったわけだけど、考えてみれば昨年
もこうして二人だったのか。忙しすぎてそんな事を考える暇も無か
ったから記憶に残っていないだけで、別に今年が特別という事でも
無いらしい。

「そう言えば、教授も予定は無いのかな」

あの人はあの人で、いい加減、良い年である。奥さんが居ても驚
かない。

「あの人は研究が恋人でしょう。寂しいとか、虚しいとか、そんな
事を感じる心は、ずっと昔に退化してしまっているわ」

「仙人みたいだ。退化というか、進化してそうだね」

僕がそう言うと、牧野さんは首を振った。

「そんな事は無いわ。決して一人では生きて行けないのに、それが
必要ないと断じるのは、欠陥よ。そんな事は、進化ではない。必要
なものすら切り捨てないと生きて行けない。あなたは、あんな風に
なつては駄目よ」

言われるまでも無い。牧野さんがそう断じるまでも無く、教授は、
そうなりたいと思わせるような魅力は、全くと言っていいほど持つ
ていない。実際、一年以上、二年近く一緒に居て、憧れた事は一度
も無い。凄いと思う事はあっても、それ以上に、そうでない部分が
多い。

まあ、僕だってあまり人の事を言えた立場ではないのだろう。た
だ、若いというだけであって、教授も僕と同じ年齢の頃は、僕と同
じように過ごしていたのかもしれないのだ。ドクターコースに進学

したことで、同じ道を進む可能性は高くなっているような気はする。しかし、それにした所で、教授ほどの情熱を僕が持ち合わせているとは言えないのだ。教授の行っている研究があったからこそ、今、僕はこうしているだけである。もしもの話をした所で意味は無いが、しかし、もしも教授がいなければ、僕は普通に就職していただろう。何も無い状態から、何かに熱中できるほど、僕は自分をロマンチストであるとは思っていない。

「やあ、やあ。御苦労様、何の話だい？」

暢気な顔をして実験室に入って来た教授を軽く流しつつ、僕たちは実験気を眺めた。あんた頭おかしいよ、なんて、いくらなんでも面と向かって言えることではない。血の通った人間はそういう事をしていない。

「無視は酷いなあ。傷つきやすいハート、つまりグラスハートなんだぜ。気をつけてくれよ」

「教授が頭おかしいという話をしていました」

牧野さん容赦ない。

「それは酷いなあ。真つ当な人生を真面目に歩んできたというのに。税金だつてしつかり修めている、社会人だよ？」

「税金を納める事は魔人間の前提条件であつて、税金を納めているからと言って真人間であるとは言えませんよ」

たたみ掛けるなあ。こんなやり取りは日常茶飯事だけれど、これで怒ったりしない教授は大人だと思う。あれこれ言っておきながら、牧野さんも結構なものだ。まあ、言っても大丈夫な相手にしか、こんな事は言わないのだろう。

遠慮のない関係と言えば聞こえはいいけれど、一向に羨ましくはない。こう言う所が、凄いと思っても尊敬できない所以である。

「教授も来たのだし、わたし達は休憩させてもらいましょう」

そう言つて僕の手を引く牧野さん。

「おいおい、せっかく来たのに寂しいじゃないか。せめて、一人ずつ休憩しておくれよ」

背後から聞こえる教授の声に耳を貸すことなく、揃って、実験棟の外に出た。容赦ない牧野さんも素敵。

毎度毎度、こうも繰り返してしまつと予定どおりみたいな話だが、知らない間に夜になっていた。研究室に入ってからという者、僕の体内時計は完全に機能を停止してしまっているようだ。それもまた、仕方のない事なのだろう。

「寒い」

「もう少ししたらお正月だもの、当然よ」

はあ。そう考えると、今年ももう終わりという事だ。研究室に置かれている、牧野さんが準備したクリスマスツリーのおかげで、クリスマスは認識できたけれど、それどころじゃない。一年の終わりがもつやってくるのだ。

この一年、何か僕は変わったのだろうか。積み上げてきたものという意味はあるだろうか。努力はしてきたと、本当に胸を張って言えるのだろうか。現実には振り回されていただけではないと、言えるのだろうか。

むむう。思いのほか、来年に向けていろいろと考えなおさなければならぬようだ。

「クリスマスか、思い出が無いのは毎年の事だけれど、そのうち良い思い出が出来るのかなあ……」

夜空を眺めて、何とはなく、そんな事を呟いた。僕ではなく、牧野さんが。なんとなく、珍しい事だった。相手の何を知っているわけでも無いくせに、珍しいなんて物言いが許されるのであれば、それは珍しい事だった。

「去年の記憶は無いけれど、一昨年は皆でお酒を飲んだりしたじゃないか」

「こんな事を自分で言いたくは無いけれど」

牧野さんはそう前置きをして、言った。

「それって、女性としてはどうかと思うわ」

ふうむ。まあ、そうかもしれない。僕は女性ではないのだから、

あれこれ言える立場ではないし、良く分からないけれど。

けれど、そんな僕にだって、分かる事はある。

「でも、あれはあれで楽しかったよ。いつまでもああして居られるとは思わないけれど、いつまでもああしていられたら良いと思うくらい」

「そうかもしれないわね…」

でも、と。

僕の手を握ったまま、言った。

「楽しかったけれど、それだって何時までも続くわけじゃない。去年のわたし達がそうだったように、皆、それぞれの理由で集まる事は無くなるわ。勿論あなたは、そんな事を言わなくても、最初から分かっているのでしょうか」

「永遠なんてない、なんて。あんな研究をしておいて言う事じゃないけれど、今でも僕はそう思っているよ。でも、だからこそ今が楽しい。楽しかった事が永遠に続く事は無くても、去年のクリスマス覚えていなくても、けれど、去年だって、そう悪いものじゃなかったはずだよ」

その時何をしていたのか、思いだす事は出来なくても。それでも充実した毎日が残っている。その日々は、今日まで続いている。忙しくて、振り回されていたとしても、止めたいとか、逃げたいと思った事は無い。

自分で選んだ事だから。そしてきつと、牧野さんと一緒だったからだ。もう、そのどちらが上だとか、そんな事は言えないくらい、それは大切な事になっている。

情けないだろうか。

不純だろうか。

浮ついているという人も、居るのかもしれない。牧野さんが欠陥であると断じた教授の在り方だって、ある意味ではストイックという言葉に置き換えられるだろう。

「永遠なんてない」

反復するようにそう言った牧野さんの顔を、僕はその時見ていなかった。

真っ暗な空から舞い降りてくる雪を眺めていた。手を繋ぐのではなく、牧野さんが僕の手を引くばかりな、僕たちの関係。

「けれど、わたしは、来年もその先も、あなたと一緒にクリスマスを過ごす事が出来たら、本当に嬉しいわ」

ふむ。

牧野さんがこんな事を言う以前に、僕は考えていた事がある。あなたの事が好きだ、と。そう言うべきタイミングを、探していた。出鼻をくじかれたというか、先を越されたのだった。

出鼻をくじかれたことで、いよいよ、僕は行き先を見失ってしまふ。シュレディングー的に言えば、箱の中の猫が自分から出てきてしまったようなものである。観測者もへったくれも無く、可能性は収束してしまっているのだ。

けれど、曖昧模糊なものに挑む事なら、任せろ。

「うん。僕も牧野さんと一緒に、ずっと居られたら嬉しい」

さて、これが果たして、本当に告白になるのかどうか。そんな話を、僕や、まして関係のないそれ以外の人間があれこれ言った所で、仕方がないだろう。告白を向けられた人間が、判断するべき事なのだから。

結果については、だから、言うまでも無い。僕たちは、この程度の言葉で分かり合える程度には、一緒に居たのだ。

「……」

「……あ」

無言で見つめあって、ロマンチックなクリスマスになろうとしたその時。間抜けな声を出したのは僕である。この時ばかりは、牧野さんも恨めしそうな顔をしたのだけれど、そんな珍しい表情を見せられても、それ以上の事だった。

「なんか実験室が凄い事になっている……」

「光っているわ」

「教授は生きているかな」

「あの人は殺しても死なないわ」

そんな感じで。牧野さんは僕たちの関係が変わっても、教授に対しては容赦がないままだった。そう考えると、いつか僕もそんなふうに遠慮のない関係になる時が来るのかもしれない。一足とばしてそうなった教授を、凄いとは思っても憧れる事は、やはりないけれど。

言うまでも無く、その日、その時、永久機関の根幹部分ともいえるものが完成したわけであって、教授も、その後元気に生きて、研究を続けている。あの人は殺しても死なない、という牧野さんの言葉通り、何度かそんな危険に見舞われながらも、死ぬ事は無かった。僕は僕で、その後教授とは別の方向に進みはしたものの、研究を続けている。永遠があるとは、未だに思えないから。だからこそ、僕は、僕だけの目的を見つける事になったのだろう。

それはきつと悪い事ではないと、僕は思うし、教授も牧野さんもそう言っていた。だからやはり、悪い事ではないのだ。

もう、あの記念すべきクリスマスから何年もたっているけれど、あのすでに遠い日々と同じく、僕は牧野さんと一緒に居る。牧野さん、と彼女を呼ぶ事はもうないけれど、時折、こんな夜にはそう呼んでしまいそうになる。

あの日開いた箱の中にあった愛は、今日まで続き、明日もまた続くだろう。けれどそれが、永遠に続くとは思わない。僕が愛しているから、そこには愛があるのだし、彼女が愛してくれるから、そこには愛があるのだろう。だからそれは、僕たちが生きている間のものだ。どちらかが生きている限りそれは続くのだとしても、いつか終わる時が来る。

それで良い。それこそが僕たちの愛なのだと、彼女も言う。

僕たちが死んだ後でも、そこには世界と共に続いて行くものがあるだろう。僕が目を閉じようとも、世界は廻っているように。地球がいつか滅びても、そこにある宇宙が無くなるわけではない。宇宙

が消える時が来ても、時間はきつと止まらない。シュレディンガーの猫は、自分が生きている事を知っている。

僕たちの日々は続いて行く。あの日見た光のように、いつかその日々も闇にまぎれて消えるだろう。それでも、輝いていた日々が無かった事になるわけではなく、そこに残るものもある。例えば、それは僕の残す研究の結果であり、彼女と共に育む命だ。

物語が終わっても、世界は続く。そこにはきつと、僕たちの知らない箱があり、輝いているものがある。その箱を開けるのが僕ではないとしても、羨むつもりはない。僕には僕の宝物があり、それを開けるのは後に生きる人間の仕事なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4866q/>

シュレディンガーライフ

2011年1月29日11時25分発行